

特異点の higher conductor module について \*)

京大・数理解 沼 昌孝 (Masataka TOMARI)

複素数体  $\mathbb{C}$  上の 2 次元正規特異点  $(V, p)$  とその特異点解消  $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$  を使って定まる  $\mathcal{O}_{V, p}$ -module  $R'_{\#} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  を考えよう。このノートでは、 $R'_{\#} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  の  $m$ -adic filtration ( $m$  は  $\mathcal{O}_{V, p}$  の極大イデアル) と特異点の numerical invariants との関係について論ずる。まず、一般次元にも通じる話をして、1 次元特異点について述べる。そして、2 次元特異点独特の話をしたい。

筆者にとって、この研究の出発点は、命題 (2.5) であった。2 次元正規 Gorenstein 特異点について、特異点の幾何種数  $\rho_g$  と算術種数  $\rho_a$  にはある制限が存在する事は、以前より経験的に知られており、また、種数が小さい時には、いくつか命題が知られていた (用語については §2 を見よ)。それを、 $R'_{\#} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  の  $m$ -adic filtration を考えることにより、具体的な命題として明らかにすることができた。だが、この研究対象が、特異点論に決定的な命題を与えてくれるかどうかは、

\*) このノートは、[11] Part I と密接な関係があります。

まだまだこれからの問題である。

2次元正規特異点についての基礎的な事柄についての詳細などは, [4], [12], [10], [11] 等を参照して下さい。

### §1. 単項化定理, 一次元特異点について

(1.1)  $(V, p)$  を  $n$ 次元被約特異点とする時, 次の data を  $(V, p)$  の partial resolution と呼びます:  $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$ , ただし  $\psi: \tilde{V} \rightarrow V$  は 固有正則双有理写像で,  $\tilde{V}$  は (局所) 正規であり, そして 解析集合  $|\psi^{-1}(p)|$  を  $A$  と書くことにします。(一次元の時は, これは正規化であり, 勿論本当の resolution です。) 我々は, ideal  $J \subset \mathcal{O}_V$  に対して, 元  $f \in J_p$  であって  $J \cdot R^{n-1}_{\tilde{V}} \mathcal{O}_{\tilde{V}} = f \cdot R^{n-1}_{\tilde{V}} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  となるものが存在することを示します。その為の準備を以下のパラグラフで述べましょう。

$\psi$  の critical locus を  $E$  と書く。すると,  $\dim E \leq n-1$  であるから, 集合  $\{q \in V \mid \dim |\psi^{-1}(q)| \geq n-1\}$  は離散的であり, 以下  $\{p\}$  であると仮定する。 $R^{n-1}_{\tilde{V}} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  の support は  $\{p\}$  に含まれる。 $R^{n-1}_{\tilde{V}} \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  を higher conductor module と呼びます ( $n \geq 2$ )。

さて,  $A$  を  $A = \left( \bigcup_{j=1}^m A_j \right) \cup A'$ ;  $A_j$  は (大

域的) 既約成分で  $\text{codim } 1$  のもの,  $\text{ord } A' \geq 2$ , というふうに分解します。ideal  $I \subseteq \mathcal{O}_V$  に対して 記号  $D(I, \psi)$  を次のように定める。

$$D(I, \psi) := \sum_{j=1}^m \left[ \inf_{f \in I_p} v_{A_j}(\psi f) \right] \cdot A_j,$$

ただし,  $v_{A_j}$  は  $\psi f$  が恒等的に消える  $\tilde{V}$  の連結成分に属する  $A_j$  に対しては  $v_{A_j}(\psi f) = +\infty$  と定め, 他の場合は,  $A_j$  の generic point に於ける  $\psi f$  の vanishing order であるとする。

各  $A_j$  に対して, 元  $f_j \in I_p$  であって, 条件

$$v_{A_j}(\psi f) = \inf_{f \in I_p} v_{A_j}(\psi f) \quad (\star)_j$$

を満たすものをとります。その一次結合  $f_{\text{or}} = \sum_{j=1}^m a_j f_j$ ,

$\alpha = (a_j) \in \mathbb{C}^m$ , が, generic な  $\alpha$  に対して, すべての  $j$  について条件  $(\star)_j$  を満たすことは, 容易に確かめることができます。上で導入した記号を使うと,  $D(I, \psi) = D(f_{\text{or}}, \psi)$  for generic  $\alpha \in \mathbb{C}^m$  ということです。

記号  $D(I, \psi)$  に対して  $\mathcal{O}_V$ -ideal sheaf  $\mathcal{L}_{D(I, \psi)}$  を,

$$\mathcal{L}_{D(I, \psi)} = \begin{cases} 0; & v_{A_j}(\psi f) = +\infty \quad \forall f \in I_p, \text{ とする } A_j \text{ が存在する } \tilde{V} \text{ の連結成分上,} \\ \mathcal{O}_V(-D(I, \psi)), & \text{上記以外の } \tilde{V} \text{ 上.} \end{cases}$$

と定めて,  $\mathcal{O}_{D(I, \psi)} := \mathcal{O}_V / \mathcal{L}_{D(I, \psi)}$  と書くことにします。

定理 (1.2) (単項化定理)

$(V, p)$  を  $n$  次元被約特異

点,  $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$  を partial resolution,  $\mathcal{I} \subset \mathcal{O}_V$  を ideal sheaf, として元  $f \in \mathcal{I}_p$  が  $D(\mathcal{I}, \psi) = D(f, \psi)$  を満たすものとする。すると, 次の関係が成立する。

(1)  $\mathcal{I} \cdot R^{n-1} \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} = f \cdot R^{n-1} \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}}$

(2)  $R^{n-1} \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} / \mathcal{I} \cdot R^{n-1} \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} \cong R^{n-1} \psi_* (\mathcal{O}_{D(\mathcal{I}, \psi)}) \cong R^{n-1} \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}} / \mathcal{I})$

ただし,  $\psi^{-1} \mathcal{I}$  は  $\psi^* \mathcal{I} \otimes_{\mathcal{O}_V} \mathcal{O}_{\tilde{V}} \rightarrow \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  の image である。

証明 (1) 次の可換図式を見よ。

$$\begin{array}{ccccc}
 R^{n-1} \psi_* (\psi^* f) & \longrightarrow & R^{n-1} \psi_* (\mathcal{I}_{D(\mathcal{I}, \psi)}) & \longrightarrow & R^{n-1} \psi_* (\mathcal{I}_{D(\mathcal{I}, \psi)} / \psi^* f) \\
 & \searrow a & \downarrow b & & \parallel \\
 & & R^{n-1} \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) & & 0
 \end{array}$$

ここで, 消滅  $c$  は,  $n=1$  の時は  $\mathcal{I}_{D(\mathcal{I}, \psi)} = \psi^* f$  であることにより,  $n \geq 2$  の時は  $\mathcal{I}_{D(\mathcal{I}, \psi)} / \psi^* f$  の  $\psi$  に対する相対次元が  $n-2$  以下であることによる。ゆえに  $\text{Im } a = \text{Im } b$  である。そして,  $\psi^* f$  を掛けることにより  $\cong$  同型

$\mathcal{O}_{\tilde{V}} \xrightarrow{\cong} (\psi^* f)_{\mathcal{O}_{\tilde{V}}}$  が導く図式

$$\begin{array}{ccc}
 R^{n-1} \psi_* (\psi^* f) & \xrightarrow{a} & R^{n-1} \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} \\
 \uparrow \cong & \nearrow f \text{ の 積} & \\
 R^{n-1} \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) & & 
 \end{array}$$

を見て,  $\text{Im } a = f \cdot R^{n-1} \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  がわかる。更に, 図式

$$\begin{array}{ccc}
 R^{n-1}_\psi(\psi'(0)) & \longrightarrow & R^{n-1}_\psi(\mathcal{L}_0(\mathcal{L}_1)) \\
 \uparrow & \searrow \begin{matrix} \cong \\ d \end{matrix} & \downarrow b \\
 \mathcal{L} \otimes R^{n-1}_\psi(0_V) & \xrightarrow[e \text{ 積.}]{} & R^{n-1}_\psi(0_V)
 \end{array}$$

を見て、関係

$\text{Im } b = \text{Im } a = f \cdot R^{n-1}_\psi(0_V) \subseteq \mathcal{L} \cdot R^{n-1}_\psi(0_V) = \text{Im } e \subseteq \text{Im } d \subseteq \text{Im } b$   
 が得られ、これらが一致することがわかった。

(2) は  $\text{coher } e = \text{coher } b = \text{coher } d$  であるから明らか。

証明終.

以後、この節では一次元特異点について考察する。

命題 (1.3) 一次元被約特異点  $(V, p)$  について、次の等式が成立する。 $\dim (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V)_{\mathfrak{m}} / (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V) = e(m, \mathcal{O}_V, p) - 1$ 。  
 たゞし、 $e(m, \mathcal{O}_V)$  は  $\mathcal{O}_V$  の  $m$  に関する重複度である。

証明  $\text{degree } D(m, \psi) = e(m, \mathcal{O}_V, p)$  であることは良く知られている。そして、定理 (1.2) により、これは  $\dim (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V)_{\mathfrak{m}} / (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathcal{O}_V)$  と一致する。与式の左辺 =  $\dim (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathfrak{m} \cdot \psi_* \mathcal{O}_V + \mathcal{O}_V) = \dim (\psi_* \mathcal{O}_V / \mathfrak{m} \cdot \psi_* \mathcal{O}_V) - \dim (\mathfrak{m} \cdot \psi_* \mathcal{O}_V + \mathcal{O}_V / \mathfrak{m} \cdot \psi_* \mathcal{O}_V)$   
 $= e(m, \mathcal{O}_V, p) - \dim \mathcal{O}_V / \mathfrak{m} \cdot \psi_* \mathcal{O}_V \cap \mathcal{O}_V$  である。  $\mathfrak{m} \cdot \psi_* \mathcal{O}_V \cap \mathcal{O}_V = \mathfrak{m}$  であることは容易にわかり、求める結果が従う。 証明終

(1.4)  $\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v$  の  $m$ -adic filtration について考えよう。  
 数  $L(V, p) \in \underline{L(V, p) = \min\{d \in \mathbb{Z} \mid d \geq 0, m^d \cdot (\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v) = 0\}}$   
 として定める。中山の補題により,  $m^i (\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v) \neq 0$  ならば  
 $m^{i+1} (\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v) \neq m^i (\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v)$  である。ゆえに数  
 $L(V, p)$  は filtration  
 $\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v \supseteq m (\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v) \supseteq \dots \supseteq m^{L(V, p)} (\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v) = 0$   
 の長さである。

$D(m, \psi) = D(f, \psi)$  とする元  $f \in \mathcal{U}$  をとると, 明らかに,  
 $D(m^d, \psi) = D(f^d, \psi)$  for  $d \geq 0$ , であるから,  
 等号  $m^d \cdot (\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v) = f^d \cdot (\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v)$   $d \geq 0$  が成立す  
 る。上記 filtration は  $f$  による  $\psi$  zero endomorphism

$$f \cdot : \psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v \longrightarrow \psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v$$

によりきまる。  $f \cdot$  の固有空間の次元は  $e(m, \mathcal{O}_v, p) - 1$  であ  
 り (1.3), nilpotency order は  $L(V, p)$  である。ゆえに,

命題 (1.5) 一次元被約特異点  $(V, p)$  において, 次の不  
 等式が成立する。  $\dim(\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v) \leq L(V, p)(e(m, \mathcal{O}_v, p) - 1)$   
 $L(V, p) + e(m, \mathcal{O}_v, p) - 2 \leq \dim(\psi_0 \mathcal{O}_v / \mathcal{O}_v)$  .

(1.6). 上の filtration に関する 2つの特別な場合につい  
 て, その言い換えに注意しておく。

$$(1) \quad L(V, p) = \dim(\mathcal{H}_2^0/\mathcal{O}_V) \Leftrightarrow e(m, \mathcal{O}_{V, p}) = 2.$$

(2)  $L(V, p) = 1 \Leftrightarrow (V, p)$  は Cohen-Macaulay of maximal emb. dim である,  $\therefore$   $\hookrightarrow$  1回  $m$  で blow up して normal になる。

証明についてひとこと. (1) は命題 (1.3) に含まれている。(2) については, 等式  $m \cdot (\mathcal{H}_2^0/\mathcal{O}_V) \cong m \cdot \mathcal{H}_2^0/m \cdot \mathcal{O}_V$  に気を付ければ, 伊藤 [5] に含まれている。

## §2. 2次元正規特異点の numerical invariants について

(2.1) 2次元正規特異点  $(V, p)/\mathbb{C}$  とある resolution  $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$  を考えよ。  $R^i \mathcal{H}_2^0$  は resolution のとり方に依るが  $\mathcal{O}_V$ -module であることが Leray の spectral sequence によって確かめることができる。そのことを念頭に置いて, 数  $L(V, p)$  を  $L(V, p) = \min \{ d \in \mathbb{Z} \mid d \geq 0, m^d \cdot R^i \mathcal{H}_2^0 = 0 \}$  と置く。(1.4) と言ったのと同様に, この数

$L(V, p)$  は  $m$ -adic filtration

$$R^i \mathcal{H}_2^0 \supseteq m \cdot R^i \mathcal{H}_2^0 \supseteq \dots \supseteq m^{L(V, p)} R^i \mathcal{H}_2^0 = 0$$

の形である。

$D(m, \psi) = D(f, \psi)$  とする元  $f \in m$  をとり,  $m^d \cdot R^i \mathcal{H}_2^0 = f^d \cdot R^i \mathcal{H}_2^0 \quad d \geq 0$  が成立し, 上記

filtration は積による巾 zero endomorphism

$$f: R'_{\mathbb{Z}} \mathcal{O}_V \longrightarrow R'_{\mathbb{Z}} \mathcal{O}_V$$

によりきまると、 $f$  の固有空間の次元は  $\dim H^1(\mathcal{O}_{D(m,t)})$  であり (1.3), したがって, nilpotency order は  $L(V,p)$  である。

ゆえに,

命題 (2.2) 2次元正規特異点  $(V,p)$  の resolution  $\psi:$

$(\tilde{V}, A) \longrightarrow (V,p)$  について, 次の不等式が成立する。

$$\dim R'_{\mathbb{Z}} \mathcal{O}_V \leq L(V,p) \cdot \dim H^1(\mathcal{O}_{D(m,t)}).$$

$$L(V,p) + \dim H^1(\mathcal{O}_{D(m,t)}) - 1 \leq \dim R'_{\mathbb{Z}} \mathcal{O}_V \quad \parallel$$

$\dim R'_{\mathbb{Z}} \mathcal{O}_V \in$  幾何種数 (geometric genus) と呼ぶ  $g(V,p)$  と書く。この節では, もうひとつ2次元独特の numerical invariant  $P_a$  をも加えて,  $R'_{\mathbb{Z}} \mathcal{O}_V$  の情報との関係を論じたい。resolution  $\psi: (\tilde{V}, A) \longrightarrow (V,p)$  に対して数  $\sup \{ P_a(D) \mid \text{non-zero effective divisor } D \text{ on } \tilde{V}, \text{ s.t. } |D| \subset A \}$  を考えよう。ただし,  $P_a(D) := 1 - \chi(\mathcal{O}_D)$  とする。これは有限値であり, resolution のとり方に依るはいことがわかっている [12]。この数を特異点  $(V,p)$  の 算術種数 (arithmetic genus) と呼ぶ  $P_a(V,p)$  と書く。この数の“感じ”をわかっていただく為、次の補題を見て下さい。



補題 (2.3) 上の状況において, non-zero effective divisor  $D$  on  $\tilde{V}$ , a.t.  $|D| \subset A$ , に対して次の等式が成立する。

$$P_a(D) = \dim R^1 \mathcal{H}_*(\mathcal{O}_{\tilde{V}}) - \dim R^1 \mathcal{H}_*(\mathcal{I}_D) - \dim \frac{m}{\mathcal{H}_*}(\mathcal{I}_D).$$

証明  $0 \rightarrow \mathcal{I}_D \rightarrow \mathcal{O}_{\tilde{V}} \rightarrow \mathcal{O}_D \rightarrow 0$  により, 完全列  $0 \rightarrow \mathcal{O}_{\tilde{V}}/\mathcal{H}_*(\mathcal{I}_D) \rightarrow \mathcal{H}_*(\mathcal{O}_D) \rightarrow R^1 \mathcal{H}_*(\mathcal{I}_D) \rightarrow R^1 \mathcal{H}_*(\mathcal{O}_{\tilde{V}}) \rightarrow R^1 \mathcal{H}_*(\mathcal{O}_D) \rightarrow 0$  が従う。この完全列により, 等式,  $P_a(D) = 1 - \chi(\mathcal{O}_D) = 1 - \dim \mathcal{H}_*(\mathcal{O}_D) + \dim R^1 \mathcal{H}_*(\mathcal{O}_D) = 1 + \dim R^1 \mathcal{H}_*(\mathcal{O}_{\tilde{V}}) - \dim R^1 \mathcal{H}_*(\mathcal{I}_D) - \dim \frac{m}{\mathcal{H}_*}(\mathcal{I}_D)$  がわかる。  $1 = \dim \frac{m}{\mathcal{H}_*}$  に気を付けてやれば, 主張が従う。 証終

これより, 特に  $P_a(D) \leq P_g(V, p)$  であり,  $P_a(V, p) \leq P_g(V, p)$  なのだが, 更に次の事が成立する。

命題 (2.4) 2次元正規特異点  $(V, p)$  について, 次の不等式が成立する。

$$L(V, p) + P_a(V, p) - 1 \leq P_g(V, p).$$

証明 resolution  $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$  を考え, non-zero effective divisor  $D$  on  $\tilde{V}$  であって  $|D| \subset A$  が  $P_a(D) = P_a(V, p)$  となるものをとる。補題(2.3)により,

$\dim R^i \mathcal{F}_*(0) - P_2(V, p) = \dim R^i \mathcal{F}_*(d) + \dim \mathcal{M}^i_{\mathcal{F}_*(d)}$  である。中山  
 の補題を使て、 $\mathfrak{m}^{\dim R^i \mathcal{F}_*(d)} \cdot R^i \mathcal{F}_*(d) = 0$  と  
 $\mathfrak{m}^{\dim(\mathcal{M}^i_{\mathcal{F}_*(d)})} \cdot (\mathcal{M}^i_{\mathcal{F}_*(d)}) = 0$  (すなわち  $\mathfrak{m}^{\dim(\mathcal{M}^i_{\mathcal{F}_*(d)})+1} \subseteq \mathcal{F}_*(d)$ )  
 がわかる。可換図式

$$\begin{array}{ccc}
 R^i \mathcal{F}_*(d) & \xrightarrow{g} & R^i \mathcal{F}_*(0) \\
 \uparrow & \searrow & \nearrow \text{精.} \\
 \mathcal{F}_*(d) \otimes R^i \mathcal{F}_*(0) & & 
 \end{array}$$

を見て、次の関係が従う。 $\mathfrak{m}^{\dim R^i \mathcal{F}_*(d) + \dim(\mathcal{M}^i_{\mathcal{F}_*(d)})+1} R^i \mathcal{F}_*(0) \subseteq \mathfrak{m}^{R^i \mathcal{F}_*(d)} \cdot \mathcal{F}_*(d) \cdot R^i \mathcal{F}_*(0) \subseteq g(\mathfrak{m}^{R^i \mathcal{F}_*(d)} \cdot R^i \mathcal{F}_*(d)) = 0$ .  
 ゆえに、 $1 + P_2(V, p) - P_2(V, p) = \dim R^i \mathcal{F}_*(d) + \dim \mathcal{M}^i_{\mathcal{F}_*(d)} + 1 \geq L(V, p)$  である。 証終.

命題 (2.5) 2次元正規特異点  $(V, p)$  について、 $P_2(V, p) = P_2(V, p)$  ならば、 $P_2(V, p) \equiv \text{Cohen-Macaulay type}$  である。

証明.  $\nu: (\mathbb{V}, A) \rightarrow (V, p)$  は resolution,  $\omega_V \otimes \omega_V \in \mathbb{K} \otimes \mathbb{K}$ ,  $V \otimes \mathbb{V}$  の dualizing sheaf とする。non-degenerate  $\mathbb{C}$ -bilinear pairing  $\langle \cdot, \cdot \rangle: R^i \mathcal{F}_*(0) \times \omega_{\mathcal{F}_*(0)} \rightarrow \mathbb{C}$  を、関係式  $\langle \alpha, \nu\beta \rangle = \langle \nu\alpha, \beta \rangle$  for  $(\alpha, \beta, \nu) \in R^i \mathcal{F}_*(0) \times \omega_{\mathcal{F}_*(0)} \times \mathcal{O}_V$  が成立するよりに、構成される (Some [9], Laufer [6])。ゆえに任意の ideal  $\mathfrak{d} \subseteq \mathcal{O}_V$

に対して, 次の duality が容易に確かめられる。

$$\{d \in R' \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_V \mid d \cdot d = 0\} \xleftrightarrow{\text{dual}/d} (W_V / \mathcal{K}(W_V)) / d \cdot (W_V / \mathcal{K}(W_V)).$$

さて,  $P_g(W_V) = P_a(V, p)$  ならば  $m \cdot R' \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_V = 0$  である (2.4)。上の duality により,  $P_g(V, p) = \dim R' \otimes_{\mathbb{C}} (\mathcal{O}_V) = \dim (W_V / \mathcal{K}(W_V)) / m \cdot (W_V / \mathcal{K}(W_V)) = \dim W_V / m W_V + \mathcal{K}(W_V) \leq \dim W_V / m W_V = \text{Cohen-Macaulay type}$ . 証終

これは、命題 (1.3) [3], 定理 (2.16) [15], 定理 B [16], [7] などの研究の延長線上にある命題である。

例 (2.6) (渡辺敬一先生による)  $P_g - P_a = \text{Cohen-Macaulay type}$  とするような例をあげておく。genus  $g$  の curve  $X$  上の line bundle  $[-d \cdot P] \rightarrow X$ ;  $P$  は  $X$  上の一点,  $d$  は自然数, の zero-section をこぶして得られる特異点  $(V, p)$  は  $\text{Spec } R = V$ ,  $R = \bigoplus_{k \geq 0} H^0(X, \mathcal{O}_X(kdP)) T^k$  と書くことができる ([8], [1], 参)。  $R$  の canonical module  $K_R$  は [2], [13] により

$$K_R = \bigoplus_{k \in \mathbb{Z}} H^0(X, K_X \otimes \mathcal{O}_X(kdP)) T^k \text{ と書け,}$$

$$P_g(V, p) \text{ は } P_g(V, p) = \sum_{k \geq 0} \dim H^1(\mathcal{O}_X(kdP)) \text{ と書ける [8].}$$

$$d \geq 2g + 1 \text{ ならば, } H^1(X, \mathcal{O}_X(mdP)) = 0 \quad m \geq 1,$$

$$H^0(X, K_X \otimes \mathcal{O}_X(mdP)) = 0 \quad m \leq -1, \text{ として,}$$

$H^0(X, K_X) \otimes H^0(X, \mathcal{O}_X(mnP)) \rightarrow H^0(X, K_X \otimes \mathcal{O}_X(mnP))$  は 上射  
for  $n \geq 1$  である。ゆえに, この時,  $p_g = p_a = \text{Cohen-}$   
 $\text{Macaulay type} = \text{genus of } X$  である。

$p_a$  はその定義により, resolution  $\psi: (V, A) \rightarrow (V, p)$  に  
おける例外集合  $A = \bigcup_{j=1}^m A_j$  の intersection matrix  $(A_i \cdot A_j)$   
によって決定できる数である。一方  $p_g$  は  $(A_i \cdot A_j)$  では決  
まらない。だが, 特異点が good  $\mathbb{C}^*$ -action を持つ場合には,  
 $R^i \psi_* \mathcal{O}_V$  の  $m$ -adic filtration が, 次の形で制限されることが  
わかる。

定理 (2.7)  $(V, p)$  を 2次元正規特異点であって good  
 $\mathbb{C}^*$ -action を持つとする。この時, 任意の resolution  $\psi: (V, A)$   
 $\rightarrow (V, p)$  に対して, 次の不等式が成立する。

$$\dim \left( R^i \psi_* \mathcal{O}_V / \sum_{m \geq 1} R^i \psi_* \mathcal{O}_V(m) \right) \leq p_a(V, p).$$

証明を述べる前に, すでに得られているこのノートの中の  
結果と組みあわせて, 次の事が得られることに注意する。

good  $\mathbb{C}^*$ -action を持つ特異点について,

$$(1) \quad m R^i \psi_* \mathcal{O}_V = 0 \iff p_a(V, p) = p_g(V, p)$$

$$(2) \quad p_a(V, p) = 0 \iff p_g(V, p) = 0.$$

$$(3) \quad P_a(V, p) = 1 \iff \dim R'_{\mathbb{C}} \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_{\tilde{V}} / \mathfrak{m} \cdot R'_{\mathbb{C}} \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_{\tilde{V}} = 1$$

$$\iff L(V, p) = P_s(V, p) \text{ かつ } P_s \neq 0.$$

ただし, (2) は  $\mathbb{C}^*$ -action の条件なしで, すでに M. Artin によって証明されている。

筆者には, "上の  $m$ -adic filtration と  $P_a$  の直接対応" は興味深い事に思える。そして,  $\mathbb{C}^*$ -action の存在の仮定のない場合に 定理が成立するかどうかは, 次に解くべき本質的な問題である。

定理 (2.7) の証明の概略. 次の命題を証明抜きで使おう。

命題 (2.8) 2次元正規特異点  $(V, p)$  と 非自明な partial resolution  $\psi: (\tilde{V}, A) \rightarrow (V, p)$  であって,  $\tilde{V}$  が高々有理特異点しか持たないものを考えよ。この時,

$$(1) \quad P_a(V, p) = \max \left\{ 1 - \chi(\mathcal{O}_{\tilde{V}}/I) \mid \begin{array}{l} I: \text{coherent ideal sheaf of } \mathcal{O}_{\tilde{V}} \\ \text{s.t. } I \neq \mathcal{O}_{\tilde{V}}, \text{supp}(\mathcal{O}_{\tilde{V}}/I) \subseteq A \end{array} \right\}$$

(2) 更に, 右辺の  $I$  として divisorial なものに制限しても等号が成立する。

さて, 我々は  $\mathbb{C}^*$ -action を特異点の一般論 ([1], [8], [13] [14]) により, curve  $X$  とその上の  $\mathbb{Q}$ -Weil divisor  $D$  を

用いて,  $R = \bigoplus_{k \geq 0} H^0(X, \mathcal{O}_X(L^k D)) T^k$ ,  $\text{Spec } R = V$ ,

とあそわす。更に, partial resolution  $\psi \in$

$$\tilde{V} = \text{Spec} \left( \bigoplus_{k \geq 0} \mathcal{O}_X(L^k D) \right) T^k \xrightarrow{\psi} \text{Spec } R$$

$\cup$   
 $X$

として構成する。ここで,  $|\psi^{-1}(p)| = X$  であり,  $\tilde{V}$  は cyclic quotient singularity (特に rational singularity) を持つのみである。  $D(m, \psi) = r_m \cdot X$ ,  $r_m \in \mathbb{N}$  と書くと,

$$\mathcal{O}_{\tilde{V}}(-r_m X) = \bigoplus_{k \geq r_m} \mathcal{O}_X(L^k D) T^k \text{ が成立する (}$$

Remark (1.5) (ii) [14])。そこで, 次の完全列を見よ。

$$0 \rightarrow \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}(-r_m X)) \rightarrow \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) \rightarrow \psi_* (\mathcal{O}_{D(m, \psi)})$$

$\parallel$   $\parallel$   
 $m$   $\mathcal{O}_V$

$$\rightarrow R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}(-r_m X)) \xrightarrow{h} R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) \rightarrow R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{D(m, \psi)}) \rightarrow 0$$

$$\bigoplus_{k \geq r_m} H^1(X, \mathcal{O}_X(L^k D)) \rightarrow \bigoplus_{k \geq 0} H^1(X, \mathcal{O}_X(L^k D))$$

これより,  $h$  は単射であり,  $\psi_* (\mathcal{O}_{D(m, \psi)}) \cong \mathbb{C}$  である。

ゆえに,  $p_a(V, p) \geq 1 - \chi(\mathcal{O}_{D(m, \psi)}) = \dim H^1(\mathcal{O}_{D(m, \psi)})$

$$= R^1 \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}} / m \cdot R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{\tilde{V}}) \text{ である。 } \psi': (V', A') \rightarrow (V, p)$$

を任意の resolution とすると,  $R^1 \psi_* (\mathcal{O}_{V'}) = R^1 \psi_* \mathcal{O}_{\tilde{V}}$  であることは標準的な議論で従う。

証明終

## 参考文献.

- [1] M. Demazure : Anneaux gradués normaux, preprint.
- [2] S. Goto, Kei-i. Watanabe : On graded rings I, J. Math. Soc. Japan vol. 30., 179 — 213 (1978).
- [3] F. Hidaka, Kei-i. Watanabe : Normal Gorenstein surfaces with ample anti-canonical divisor, Tokyo J. Math. 4., 319 — 330 (1981).
- [4] 樋口, 吉永, 渡辺 (公) : 多変数複素解析入門, 森北出版株式会社, 1980.
- [5] S. Itho : Analytically unramified local ring について, 可換環論シンポジウム報告集(第5回) 71-76 (1984).
- [6] H. B. Laufer : On rational singularities. Amer. J. Math., 94. (1972) 597 — 608.
- [7] S. Ohyama, E. Yoshinaga : A criterion for 2-dimensional normal singularities to be weakly elliptic. Science rep. of Yokohama National Univ. ser II, vol 26, 5-7 (1979).
- [8] H. Pinkham : Normal surface singularities with  $\mathbb{C}^*$ -action. Math. Ann. 227, 183 — 193 (1977).
- [9] J. P. Serre : Un théorème de dualité. Comm.

Math. Helv. 29, 9-26 (1955).

- [10] M. Tomari : A  $\mu_3$ -formula and elliptic singularities.  
preprint. R.I.M.S. No 458.
- [11] \_\_\_\_\_ : 幾何種数の計算公式と楕円型特異点について (総合報告, その他), 1984年3月. 数理研シンポジウム "多様体の特異点の最近の成果" 講究録.
- [12] P. Waegerich : Elliptic singularities of surfaces, Amer. J. Math. 92., 419-454 (1970).
- [13] Kei-ichi Watanabe : Some remarks concerning Demazure's construction of normal graded rings. Nagoya. Math. J vol 83 (1981) 203-211.
- [14] \_\_\_\_\_ : Rational singularities with  $k^*$ -action in "Commutative algebra" Proc. Trento Conf. edited by S. Greco and G. Valla. 339-351. Lecture Note. Pure and applied Math. No 84 (1983). Marcel Dekker.
- [15] Kimio Watanabe : On plurigenere of normal isolated singularities I. Math. Ann. 250, 65-94 (1980).
- [16] S.-S.-T. Yau : On maximally elliptic singularities Trans. A.M.S. 257, 269-329 (1980).